

## 批評と紹介

侯冲著

### 白族心史——『白古通記』研究

立石 謙 次

#### 一

本書の研究対象となる『白古通記』は明代以降、今の中国雲南省の西部にある大理地方で作られたとみなされる史料である。現代の大理白族自治州には、中国の少数民族の一つである白族（ペー族）<sup>①</sup>が多く居住している。現在の白族の人口は約一六〇万人弱、そのうち約一〇〇万人弱が大理地方に集中している。白族の先祖は、七世紀後半から一三世紀後半までに雲南地方を中心とした地域に展開した南詔国・大理国の支配階層の一つである白蛮と考えられている。そして元明清代には、白人と呼ばれるようになった。

この白族及びその先祖は、古くから漢字を用い自らの世界観を表現してきた。後述するように、『白古通記』は彼ら

白族自身が考える歴史、そして同地に伝わる伝説を記したものとされる。

侯冲氏が指摘するように、『白古通記』は明清代以降の雲南地方史料に大きな影響を与えている。このため同史料の研究によって、雲南地方史料の史料系統を明らかにすることができると期待される。また同史料の雲南地方史ひいては白族の歴史文化全般に対する影響、そして漢人文化と中国辺境民族の文化との関係を探る上でもきわめて重要である。

しかしこれまでも『南詔野史』をはじめとする『白古通記』及びこれに影響を受けた史料（以下、『白古通記』史料と略称する）<sup>④</sup>の利用については、その信憑性において疑問視されてきた。それは雲南地方史においては、正史をはじめとするいわゆる「信憑性の高い史料」が重要視されてきたためである。一方では、『白古通記』及びこれに影響を受けた史料を積極的に用い、南詔国・大理国時代の歴史的状况を明らかにしようとする研究もある。しかし、これらの多くは、明清代以降の『白古通記』系史料に対する史料批判を十分に行わずに考察を進めているものが多く、史料操作の面でいまだ議論の余地がある。<sup>⑤</sup>

このように明清代以降に作られた『白古通記』系史料は、これまで正当に史料的价值を認められていなかったか、あるいは誤った用い方をされてきた史料である。後述するよ

うに、本書は、この『白古通記』の価値を再確認するだけではなく、これまでの雲南史研究の問題点を明らかにしたという点において、非常に価値があると考えられる。

まず『白族心史』という題名についての説明が必要である。本書の「自序」によれば、明の崇禎一年（一六三八）、蘇州で<sup>ひょうり</sup>早く備えて井戸をさらっていた際に鉄の箱を掘りあてた。箱の中には大宋の孤臣である鄭思肖という人物が著した「心史」が入っていた。その内容は、詩歌・宋滅亡期の雑記であった。それから記述には、民族存亡の危機に直面した際の民族の情感からみた歴史・気節・華夷の別・悲痛の情が表現されているという。

侯冲氏が『白族心史』というタイトルを選んだのは、明軍によって征服された白族たちがどのような意図によって、『白古通記』を創り上げたのかを考察しているからである。つまり本書の目的は、『白古通記』の記述内容そのものから雲南地方史の歴史的事実を考察することではない。むしろその目的は本書成立の背景とそこよりみえる白族の心が創り上げた歴史、つまり白族の民族意識の形成の歴史を明らかにすることにある。

『白古通記』は、もともと『白古通玄峰年運志』という書名であり、『白古通』・『白古記』などとも略される。また、『焚古通記』・『焚古通』とも記される場合がある。『白

古通記』は、現代の白族の祖先が彼らの言葉である白語（ベー語）を漢字によつて書き留める「白文」によつて記された書物であるという。<sup>7)</sup>正確な成書年代・著者などは明らかでないものの、侯冲氏は明初の成立とみている。ただし同史料は、清代には失われてしまった。現在の『白古通記』は、王叔武氏が関連史料より佚文を収集し、まとめたものである。<sup>8)</sup>

現存の『白古通記』は佚文のみなので、もともと全体としてどのような内容であったかは判断できない。しかしその佚文から判断する限り、以下の内容がみられる。①南詔国・大理国を中心とする雲南地方の歴史に関する説話、②南詔国後半期から雲南地方に存在していた阿嵯耶観音への信仰及び③その他現地の宗教・諸信仰に関わる説話などであり、一種の説話集と考えられる。

## 二

次に本書の構成を示し、その後に各章ごと個別に内容を紹介していきたい。

- 第一章 関於『白古通記』的研究
- 第二章 称名
- 第三章 成書
- 第四章 “白族心史”

第五章 書用白文

第六章 白子国

第七章 神話伝説

第八章 義兼衆教

第九章 対雲南地方史志的影響

第十章 白族文学史上的《白古通記》

第十一章 本書的結論

第一章では、これまでの『白古通記』研究の現状とその意義を述べている。そして、本書の考察にて使用する数多くの漢籍史料を紹介している。また最後に、本書を通じての研究手法と視点について以下の四点を挙げている。それは、①まず現存の『白古通記』の佚文と『白古通記』から発展した周辺史料の内容とを検討し、その全体的な状況を把握する。②同史料を漢籍史料、特に元明時代の雲南地方史料と比較検討し、史料系統を整理する。③『白古通記』に記される神話伝説を単に荒唐無稽な説話と捉えず、その神話伝説が生まれた原因とその由来を考察する。④さらに、雲南仏教史との関わりから考察する、という点である。

『白古通記』の名は明の嘉靖年間に、初めて雲南地方史料にみられるようになる。そしてすでに述べたように、さまざまな名称で明清時代の史料に登場する。第二章では、これら雲南地方史料の記述に対する比較検討から、『白古

通記』とみられる諸史料の名称を列挙する。

第三章では、『白古通記』の成立について考察する。従来この同史料は、元代に成立したものだと考えられてきた。侯冲氏は諸史料の比較検討から、明初に成立した書物であると論証した。また、白語を漢字で書き写す「白文」によって記された石碑が多く発見されている大理盆地北部の喜洲をその成立地点であると結論した。またこの章では、『白古通記』がどのような史料あるいは内容に依拠して作られたかという史料系統についても考察している。

第四章では、さらに踏み込んで『白古通記』成立の動機とその歴史的背景を考察する。同章の結論だけを述べれば、明代初期に雲南は明軍による征服を被る。それまでも雲南地方は元朝の支配を受けていた。しかし大理を中心とする地域は、いまだ大理国皇帝の末裔である大理総管段氏が支配していた。ところが明の雲南征服により、大理総管段氏は滅亡した。『白古通記』は、そのような危機的状況の中、民族の精神的な歴史、民族存亡の危機に保つべき気節、失われた故国に対する懐古の情、そして白族と外来民族漢人との相違とを表現するための「心史」として作られたと指摘する。

この『白古通記』の原本は、「白文」によって書かれたとされる。白文とは漢字によって、白語（ペー語）の音を

記したもので、原理としては日本の万葉仮名に近い。侯冲氏によれば、明代ごろ大理地方の一部で墓誌や宗教書などに使用されたという。ただし漢語と白語との声調の違い、使用される文字に規範がないこと、使用地域の狭さ、利用範囲の狭さからその使用は限られていた。このため、白文が広く白族全体で広く使用されることはなかった。第五章では、白文の定義とその使用の歴史を確認した上で、なぜこの史料が白文によって書かれたかを考察する。そしてその原因を白族の祖先が民族意識を強調することにあつたからとする。また、白文が本来、大理地方での民間宗教で多く使用されていたという事実から、自らの故国を哀悼する意図があつたとも推測している。

そして第六章から第八章にかけて、具体的に『白古通記』に記される説話内容について考察する。各内容の初出史料を紹介しつつ、さらに周辺史料との比較検討から『白古通記』にとつてのそれぞれの説話の意味について個別に考察している。そして、そこよりみえる白族の宗教的世界観、民族意識を明らかにしようと試みる。

第九章では、『白古通記』が雲南の地方史料及び白族の文学に与えた影響について考察し、具体的な各史料における影響箇所を示しつつ、『白古通記』が幅広く明代以降の雲南地方史に影響を与えていた実態を明解に示している。

そして、現在みられる白族の文学、たとえば現在白族の民間に広まっている口承文学、碑文、現在白族の間で信仰されているさまざまな神祇の封号、紀行文、詩歌、小説などの分野で大きな影響を与えていると指摘している。

最後の十一章において、本書の結論を述べる。侯冲氏は大まかな結論として、『白古通記』は白族の文化と民族意識とに顕著な影響を与えていると指摘する。その指摘の内容を個別的にみていくと、おおよそ以下の四点となる。それは①『白古通記』は、南詔国末期の『南詔図伝』や元代の『紀古演説原集』などの明代以前の雲南地方で作られた史料に依拠している。しかし明の雲南征服以降、それまでの文献史料の多くは失われてしまった可能性がある。このため、『白古通記』成立以降、『南詔野史』などの雲南地方史料は、多くこの『白古通記』を参考に作られるようになった。この点について言えば、『白古通記』は、雲南地方史料中の分水嶺ともいえる。②白族の祖先たちは、『白文』によって、白族の起源・神話伝説・洱海地域（大理盆地地域―評者）の民族関係などを記している。これにより、白族の文化・民族意識の形成に大きな影響を与えたと考えられる。③元代以前、白族の祖先は雲南の広い地域に存在していたものの、その後ほとんどが漢人に組み込まれていった。しかし、大理地方では現在もなお、白族が集中的に居

住している。その原因の一つに、大理地方では『白古通記』の成立以降、白族の民族意識が強化されたためと指摘する。④『白古通記』は多く、南詔国・大理国時代の説話を題材としている。これら内容は、『白古通記』による、まったくの創作ではない。これまでも、『白古通記』及びその流れを汲む明清時代の史料と考古学的資料を含めた周辺史料との比較検討から、これまで明らかでなかった南詔国・大理国の歴史的事実の一端が明らかになっている。このため、その利用には十分な比較検討を要するものの、南詔国・大理国研究の上でも重要な史料である、という指摘である。

### 三

以上が本書の内容である。本書の意義は、これまで歴史史料としての信憑性が低いとして否定されてきたか、あるいは誤った使用のされ方をしてきた『白古通記』という史料を初めて本格的に考察を加えたところにある。

ただし侯冲氏の研究について、若干の検討の余地を残す部分がある。まず、すでに述べたように、第二章では明清代諸史料中の『白古通記』とみられる引用史料の名称について考察する。その中で『白古通』や『白史』などといった史料が『白古通記』と同一史料であるという指摘は納得できる。ただし『郡志』や『旧志』などと呼ばれる史料ま

でも『白古通記』であるという指摘には同意しかねる。おそらく侯冲氏の根拠は、その引用される内容が『白古通記』と類似しているということからであろう。しかし内容が類似しているというだけで、それが同一の史料であるとは言えない。むしろ『白古通記』にみられる説話の内容は、複数の書物に記されるほど明初時期の白族社会の中に一定の広がりを見せていたことを示している可能性はないのか。

また侯冲氏は第五章で、『白古通記』（の原本）が、「白文」によって記されたとして、現存の『白古通記』佚文から、「白文」の意義を考察している。『白古通記』を引用する明清代の諸史料には、『白古通記』が「白文」で書かれていたことが明記されている。このため『白古通記』の原本が「白文」で書かれていたことは間違いない。

しかし現存の『白古通記』の佚文のすべてが、通常の漢文（それを白語で発音していたとしても）で書かれている。このため、現存の『白古通記』佚文の内容から「白文」の意義を説くことは、妥当性に欠ける。「白文」の意義を説くのであれば、直接現存の「白文」史料から考察するべきではないだろうか。

そして侯冲氏は、『白古通記』は白族の文化・民族意識の形成にとって明らかな影響を与えたと結論する。そのこと自体は妥当な結論である。ただし見方を変えれば、「白

『古通記』が成立し得たのは、それ以前の白族の文化や民族意識が大きく関わっていたからとも考えられないのか。つまり『白古通記』の成立が一方的に白族の文化・意識に影響したと考えるのではない。それまでの白族文化・意識が『白古通記』の成立を促し、『白古通記』の成立がその後の白族の文化・意識に影響したことを強調すべきではなかったか。侯冲氏の指摘のとおり、『白古通記』の原本が当時の白族の口語を写した「白文」によって書かれていた可能性が高い。そうであるなら、当時すでに民間に口承によって伝えられてきた世界観・歴史観が明の雲南征服を契機に文書化されたことを示している可能性はないのだろうか。

以上が評者による若干の疑問点である。ただし『白古通記』以前の雲南地方史料が極端に少ない現状を考えるならば、これは単なる評者のないものねだりに過ぎないかもしれない。これらの問題が解決されるためには、今後ともフィールドワークも含めた現代白族の口承文学及び民間文献と『白古通記』との関連性の研究が必要となろう。

以上、若干の問題点を指摘したが、本書はこれまでの明清以降の白族関連史料の研究と一線を画すものである。

侯冲氏は、『白古通記』に記されるこれらの説話の多くが後世に白族の祖先たちが自らの起源を語るために作られたものであった事実を『白古通記』を中心とした史料系統

の考察から指摘している。しかし一方で、南詔国・大理国以降に作られた説話・伝説を単なる荒唐無稽な説話ととらえなかった。これら説話をむしろ白族の世界観・民族意識の形成にとつて重要な役割を担ったと考えて、積極的に評価している。そして厳密な史料間の比較検討から、『白古通記』の成立後、雲南地方史料における同史料の影響の大きさを明瞭に証明している。

また侯冲氏自身は、それほど強調しておられないものの、本書はこれまでの南詔国・大理国研究にとつても大きな衝撃を与えた。すでに述べたように侯冲氏は、『白古通記』及び周辺史料との詳細な比較検討を通して、明清時代以降の説話のどの内容が実際に南詔国・大理国時代に関連する記事であるのか、またそうでないのかを選別した。

現在の研究者のみならず、白族自身も自らを南詔国・大理国の末裔と考えている。このため『白古通記』に影響を受けた後代の白族関連史料は、これまで一部の研究で詳細な史料批判もせずに南詔国・大理国史の考察に使用されてきた。

このため本書の出版により、一部の史料操作に誤りのある研究（前掲註5参照）は、その意義を失ったか、少なくともその価値を著しく減じたことになる。本書は白族研究の立場のみならず、南詔国・大理国という雲南地方の王朝

史にとつても非常に重要な研究である。

註

(1) 白族とは、一九五〇年以降、中国の民族識別工作によつてつけられた呼称である。ただしここでは、侯冲著書の表現に従い、歴史的な白族の祖先もそのまま白族と表記する。

(2) 国家统计局人口統計司等編『中国民族人口資料』(一九九〇年人口普查数据)、中国統計出版社、一九九四年、六五六頁及び六八〇頁参照。

(3) 侯冲『白族心史——『白古通記』研究』雲南民族出版社、二〇〇二年、七頁参照。

(4) 林謙一郎「南詔国後半期の対外遠征と国家構造」『史林』卷七五—四、一二九頁、一九九二年参照。

(5) たとえば張錫祿『大理白族仏教密宗』雲南民族出版社、一九九九年・李東紅、『白族仏教密宗——阿叱力教派研究』雲南民族出版社、二〇〇〇年・段玉明『大理国史』雲南民族出版社、二〇〇三年などがある。これらは、それぞれ南詔国・大理国時代の歴史・宗教についての研究である。その論点には、首肯できる点も多いものの、同時代の論証に際して、唐宋代の中国側史料と明清代の『白古通記』系史料との引用が混在しており、史料操作

の面において問題がある部分がみられる。また侯冲著書の出版以後の研究であるが、連瑞枝『隱藏的祖先——妙香国的伝説和社会』生活・読書・新知三聯書店、二〇〇七年では、文化人類学の立場から、むしろ積極的に『白古通記』系史料を活用して、南詔国時代の社会を解明しようとして試みている。そのアプローチの方法は評価できるものの、やはり史料操作の点において、問題があると考えられる。

(6) 侯冲 二〇〇二年、「自序」八—一〇頁参照。

(7) 侯冲 二〇〇二年、一一二頁参照。

(8) 王叔武『雲南古佚鈔』雲南人民出版社、一九八一年、五〇—七二頁参照。

(9) 侯冲 二〇〇二年、一二三—一二六頁参照。

侯冲『白族心史——『白古通記』研究』雲南民族出版社、二〇〇二年、四六九頁

(東海大学等非常勤講師)